
ロミオVSジュリエット～王子と姫の3ヶ月戦争～

雪村マイカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロミオVSジュリエット〜王子と姫の3ヶ月戦争〜

【Nコード】

N4236R

【作者名】

雪村マイカ

【あらすじ】

百合ノ花高校2年生・姫野真梨亜は、始業式の日と同じクラスのイケメン御曹司に告白される。面識がないのとタイプではない事を理由に断ろうとしたら、「夏休みまでに必ず君を落としてみせる」と逆に宣戦布告されてしまっ…。

「姫」と「王子」のドタバタな追いかけてを描く。
果たして「王子」は「姫」を手に入れる事が出来るのか!?

ここで会ったが1年目（前）

4月7日、私・姫野真梨亜ひめのまりあは高校2年生になった。

校門をくぐって校舎までのんびり歩いていると、誰かが呼ぶ声がする。

振り返るとそこには、小学校からの親友・上村うえむらなつみの姿があった。

「おはよう姫ちゃん！」

「おはよ、なつ。」

「今年は同じクラスだと良いね。」

「本当だよ。端から端を行き来するのはもう嫌だもん。」

私達は他愛ない話をしながら、新しいクラスが書かれた掲示板を指した。

「凄い人…。これじゃ見れないね。」

「いいよ、私見てくる。あんた小さいから埋もれるもんね。」

「ひどーい姫ちゃん！」

「あはは！」

…と意気込んで行ったは良いけど、これは私でもキツイ。何とか前に行って掲示板を見ると、E組の所に私となつの名前があった事を確認した。

「やった！なつと一緒にだ！」

「あれ、姫じゃん。」

「ホンマや。姫ちゃん、おはようさん！」

「あ、みーちゃん、桜！」

先に声を掛けてきたのが、西島美夕にしじまみゆで、関西弁が藍田桜あいだざくら。
1年生の時、同じクラスで仲良くなった友達だ。

「今年も3人一緒だよ。」

「マジで!？」

「うん！」

「良かったー！」

クラスを確認した私達3人は人の輪を抜け出して、1人待ってるな
つの元へと向かう。

2人はなつともすぐに打ち解けてくれたみたいだった。

「今年はええ年になりそうやなあ。なっちゃんとも仲良くなれたし、
何より学校のアイドル・王子谷君おうじたにと同じクラスやったもん。」

「え、ほ、本当に!？」

「ちよつと桜!そういう事は早く言つてよ！」

「ごめんごめん!喋つとつたらタイミング逃してもうて。」

「でもラッキーだなあ。あのイケメンが毎日のように拝めるんだも
ん。」

「…誰それ？」

3人の会話に若干付いていけなかった私は、質問をぶつけてみる。
するとみーちゃんと桜はおろか、なつにまで信じられないといった
顔をされた。

「姫ちゃん! あんなに去年私が話してたのに…。何で覚えてないの
!？」

「え、だって…。」

「あんたねえ、王子谷君を知らないなんて、百合ノ花高校の女子生徒失格だよ!」

「はあ!？」

「王子谷君はそのくらい有名っちゅーこっちゃ。」

「えええ…。」

どうしよう、私、このままじゃ仲良しグループから仲間はずれにされる?？」

なんて心配をしていたら、後ろからアイドルグループのコンサートバリの黄色い歓声が聞こえた。

その黄色い歓声に包まれながら、笑顔を振り撒きながら颯爽と歩く男子が1人。

なつが、ほら、あれだよと言ってきたので、とりあえずそのご尊顔を拝見させて頂こうじゃないか。

「…はあ、まあ、確かに顔はかっこ良いけど…。」

「でしょ?あれが毎日見られるんだよ!」

「毎日は見たくないよ。美人は3日で飽きるって言うし。」

「本当に姫はイケメンに興味ないよね。」

「さすが、好きなタイプは厳つい格闘家タイプなだけあるわあ。」

「厳つい人の何が悪いんだよ。自分より弱い奴なんて、私は絶対に嫌だもん。」

「ま、自分より弱い人が嫌って気持ちは分かるけどね。」

気が付いたら教室の前まで来ていた私達は、出席番号順に決められていた座席に荷物を置く。

そこそこ人数も集まっていて、教室は既に賑やかになっていた。まだ先生も来ないからと日当たり良好な桜となつの席に集まって話していたら、先程騒ぎの元になっていた男が教室に入ってくる。

途端に教室内にいた女子がうるさくなったのは、言うまでもない。

「やっぱ凄いなあ、王子谷君。」

「そらあイケメンで背も高く、勉強もスポーツも出来て、誰にでも優しく、おまけに家は大金持ちってなれば、女子は誰でも騒ぐやろ。ウチかて付き合えるなら付き合いたいわ。」

「でも付き合ったら付き合ったで、他の子からの嫉妬が凄そう…。確実にイジメられるよね。」

「間違いない！」
「…。」

くだらねえ、なんてぼんやり考えていたら、超絶イケメンがこっちに向かって歩いて来るのが見える。

悪い幻かと思ったが、3人がキヤアキヤア言い出したのでどうやら幻ではないようだ。

ふと顔を見てやると、そいつは優しい笑顔で私を見た。

その笑顔が、これから起こるバトルのゴングでもあった事を知らずに…。

ここで会ったが1年目（前）（後書き）

桜ちゃんの関西弁はほぼ似非です。

所々おかしい箇所があるかも知れませんが、
ご了承ください。

ここで会ったが1年目（後）

「ちょっと良いかな？」

イケメンはその素敵な笑顔を崩す事なく私にそう言った。

3人は何が起こったんだという顔をしている。

いつしか周りのクラスメイト達も何だ何だところっちを見だしていた。

「姫野真梨亜さん、だよね？」

「…そうだけど。」

「回りくどいのは嫌だからはっきり言うよ。俺、ずっと前から君の事が好きだったんだ。良かったら俺と付き合ってくれないかな？」

「…ハア!？」

「ええええ!？」

あまりにも突然過ぎる、告白。

それと同時に教室中に響き渡る、私の間拔けな返事とクラスメイトの大絶叫。

女子の皆様に至っては、能面よりもお化けよりも怖い顔で私を睨みつけていた。

ちょっと、睨む相手間違ってるって。と思ったが、男が絡むと怖い生き物にそんな事は言えまい。

「あ、あの…。」

「えっ…と…。」

「何やねんなこの展開。めっちゃ少女漫画やん。」

「…あのさ、王子だか何だか知らないけど、私はあんたの事なんか

全く知らないし、第一タイプじゃないから付き合えない。それ以前に、いくら有名人だからって名乗りもせずに告白なんて失礼じゃない？」

3人の発言で我に返った私は、イケメンに向かって捲くし立ててやった。

だが奴にその攻撃は効かなかったようだ。

「ごめんね。確かにいきなりの告白は失礼だったね。改めて言うよ。
おうじたにせいや
俺は王子谷聖哉っていいです。姫野さんの事が好きなので付き合ってください！」

「いや、私さっき付き合えないって言ったよね!？」

「え、そうだったけ？」

「そうだよ!」

にっこり笑ってサラツととぼけてみせた目の前の男に、少々の殺意を覚えた。

こいつはまるで話が通じない。

このゴーイングマイウェイ・イケメンを何故女子達は持ち上げてるんだろう。

やっぱりこれは、顔とお金の力なのか？

「君が何て言おうと俺は諦めないよ。1年の時からずっと好きだったんだし。ねえ、俺に少しでもチャンスはないのかい？」

「ないね。さっさと他の子を好きになりなよ。」

「これっぽっちも？」

「しつこいなあ! ないもんはないんだっつもの!」

段々と荒くなる声。

クラスメイトに助けを求めて見渡してみても、誰も助けてくれない。それどころか、私達のやりとりを面白がって見ている。

ああ、みんななんて薄情なんだろう。

「…じゃあ、3ヶ月。」

「え？」

「今日から1学期終業式までの約3ヶ月間で、俺は君を振り向かせてみせる。」

「ハアア!？」

それは王子様からの宣戦布告だった。

好きでもない男に3ヶ月も付き纏われるなんて冗談じゃない。

速攻で断ろうとしたが、間髪入れずに奴は話を続けた。

「3ヶ月の間に君の気持ちが俺に傾いたら、もちろん彼女になってもらうよ。君の気持ちが今と変わらなかったら、俺は潔く身を引いて金輪際君とは関わらない。どうだい？お互いにメリットはあるだろう？」

「!」

…なるほど。

私の気持ちちが3ヶ月ぽちで変わるなんて有り得ないから、この勝負はなかなか良いかもしれない。

「面白い、乗った!」

「姫野さんならそう言ってくれると思った。」

「あんたの事なんか、絶っっ対に好きにならないんだから!」

「上等だよ。俺は絶っっ対に振り向かせる自信があるけどね。」

「やれるもんならやってみろよ、この似非王子!」

「ふふっ、そんな所も可愛くて好きだよ。」

奴は砂糖5杯のミルクティーと同じくらい甘い台詞を吐いて、私の頭を撫でる。

勢い良く振り解くと少しだけ寂しそうな顔をされたが、知ったっちゃない。

「すごい展開になっちゃったね。でも、親友が学園のアイドルに告られたなんて私も誇らしいな！」

「本当！このままくっ付いて、校内一有名なカップルになって欲しいよね！」

「これからどうなっていくのか見物やな。楽しみが増えたわ。」

人事だと思って（いや、実際人事なんだけど）はしゃぐ3人とクラスメイトを尻目に、私は静かに闘志を燃やす。

こんな男に踊らされてたまるか、絶対に負けたくない。

「じゃ、よろしくね、姫野さん。」

「何でも思い通りになると思ったら大間違いだって教えてやるよ。」

こうして私は王子谷聖哉と勝負する事になってしまった。

バイバイ、16年間平凡だった私の人生。

どうやらこれから、非凡な日々を送る事になりそうです。

キャンディ・ホッパー（前）

始業式も終わり、2年生の授業が始まってから早3日。

あれだけ派手に宣戦布告しておきながら、王子谷は何も仕掛けて来ない。

いや、その方が私にとっては有り難いんだけど、こうも何も起こらないと逆に怖いのだ。

まあ言ってもまだ3日だし、今はこの平和を噛み締めてれば良いか。そう思いつつ教室のドアを開けると、異様な光景が私を出迎えてくれる。

ダンボール一杯の某海外の棒付きキャンディ（プリン味）が、私の机に置かれていたのだった。

「おい姫野、これ、旦那がお前にプレゼントだってさ！」

「いやあ、御曹司の考える事はスケールがデカイねえ。」

啞然としている私に、冷やかしの言葉をかけてくる馬鹿な男子が2人。

確かにそのキャンディのプリン味は、私がコンビニで見つけたら絶対に買うくらい大好きなものだ。（ちなみに今朝も買った）

だけど、あいつにはその事を話してないはず。

一体どこから情報が漏れたのだろう。

「誰だよ、私の好物あいつにバラした奴！」

「知らねえよ。って言うかお前がそれ好きなんて今知ったし。」

「王子谷がストーカーでもして調べたんじゃねえの？」

ギヤハハ、と笑いながら男子は去っていった。

もしストーカーが本当なら、洒落にならなさ過ぎる。
ダンボールを見つめながら青ざめていると、なつが申し訳なさそうに私に近付いてきた。

「姫ちゃん…。」

「なつ、おはよう。」

「…ごめんね、それ、王子谷君に教えたの、私なんだ…。」

「ええ!？」

「私も、色々聞かれたから教えちゃった…。」

「みーちゃん!」

「ウチもや…。」

「桜!」

…そこから攻めてくるとは予想外だった。

女子を手なずけるのは、赤子の手を捻るより簡単ってか。
それにしてもここまでやるもんか、と4人で話していると、このとんでもないプレゼントの真犯人が教室に入ってきた。

「おはよう姫野さん。俺のプレゼント、気に入ってくれたかい？」

「あんた、ふざけてんの!？いくら好きでもこんなに食べられる訳ないだろ!私の事も勝手に聞き回りやがって!」

「ああ、喜んでくれたみたいで良かった。」

「喜んでねえ!」

やっぱり話が通じない。

でもそんな奴を見て、なつ、みーちゃん、桜を含むE組の女子はみんな顔を赤らめている。

何か色々とおかしいって誰か突っ込んでやって欲しい。

そうこうしているうちに、担任の小村先生こむらが入ってきた。

そして授業前のHRで、何故か私がお菓子を大量に持ち込むなど怒

られる。

これは王子谷がやった事だと言っても、先生は信じてくれなかった。ちゃんと本人だってそう言ってるのにも関わらず、だ。

ますます王子谷に対して不信任を募らせた私は、その日1日中続いた異常なまでの求愛行動を断固として無視してやった。

掃除もHRも終わってやっと放課後。

いつもなら4人でダラダラ喋りながら帰っているが、今日はパン屋さんにお使いを頼まれているので私だけ先に帰らせてもらった。

そこは家の近所で、私の幼なじみ一家がやっている所だ。

店は小さいが味は超一流で、よく雑誌やテレビでも紹介されていてリピーターも多い。

どうでも良い情報だが、姫野家は昔からパンはそこでしか買わないのだ。

「おばさん、こんにちは。」

「あら真梨亜ちゃん、いらっしやい！今日もミルクパン？」

「うん、あとね、メロンパンと、ツナマヨパンと、コロッケパン2個ずつちょうだい。」

「はいよ。ちよつと待っててね。」

「よう、真梨亜。」

「あ、たー君！」

この「たー君」こそ、幼なじみの鈴木尊。すずきたける

幼稚園から中学校まで、半分以上は同じクラスで過ごして来た。

高校は離れ離れになったけど、お使いでお店に行く度に色々と近況報告をし合っている。

私の周りにいる男子で、一番仲の良い奴だ。

「ひいじいちゃんに買ってくるのか？」

「うん。弟妹の分もね。」

「あいつら、だいぶ会ってないけど元気か？」

「元気だよ。今度連れて来る。」

「おう。いつでも来いよ。」

たー君と話していると、おばさんがパンを持ってきてくれた。
またね、と挨拶をして店を出ると、携帯が鳴っている。

サブディスプレイには、見知らぬ番号が光っていた。

キャンディ・ホッパー（後）

「知らない番号には絶対に出ない。」

これは初めて携帯を買って貰った時、大オジイ（私はひいおじいちゃんをこう呼ぶ）に言われた事。

その教えを守り、シカトを決め込む事20回。

知らない番号からの着信はなくなった代わりに、今度はみーちゃんからの着信があった。

「ちょっと姫！何で出てくれないの！？」

「いや、だって知らない番号だったんだもん。」

「せっかく王子谷君が電話掛けてくれてたのに！」

「え、あれあいつの番号だったの！？」

「そうだよ。私が王子谷君にあんたの番号とメアド教えたの。」

プライバシーまる無視かよ。

同じ事を企業がやったら書類送検されるこの時代に何という事だ。

まあいい。家に帰ったら即メアドを変えて、あいつの番号は着信拒否に設定しよう。

「姫野さん？」

「うわっ！な、何だよ！」

「あまり馬鹿な事は考えない方が良いよ。俺は着信拒否されても、メアドを変えられても、君への気持ちは変わらない。君が逃げるならどこまでも追いかけるからね。」

「ぐっ…。」

いつの間にか王子谷に代わっていた事と、自分の考えを全て見抜かれていた事に怒りを通り越して驚いた。

何でこんな奴に惚れられたんだろう。

王子様に見初められる要素なんて、私にはこれっぽっちもないのに。でもまあとりあえず、番号とメアドの登録だけはしておいてやろうかな。

自分から連絡しなければ良いだけの話なんだし。

私は電話を切って携帯を鞆にしまい、家を目指した。

玄関でただいまと言うと、小学4年生の妹・優梨亜ゆりあと小学校に入っただばかりの弟・大樹だいきが出迎えてくれた。

2人は歳が離れてるせいか、私によく懐いてくれてとても可愛い。

おいおい、お帰り！なんて満面の笑みで言うなよ。
ぎゅっと抱きしめて離したくなるじゃないか。

「お姉ちゃん、さっきね、お姉ちゃん宛に贈り物が届いたんだよ。」

「こーんなおっきな箱だったの！」

「私に？何だろう…。どこにあるの？」

「こっち！」

2人に連れられリビングに行くと、何やら見覚えのあるダンボールの姿が。

まさかと思い開けてみると、朝見た光景が再び蘇る。

そう、あの大量のプリン味キャンディだ。

どうしたら良いのか分からなくなつて、「ご自由にどうぞ」と張り紙をして教室に放置プレイをかましてやった筈なのに、何故我が家に…。

訳の分からない状況に盛大な溜め息をついていたら、台所で晩ご飯

の支度をしていた母・志穂^{しほ}が言った。

「あんた、せっかく彼氏候補の男の子がくれた物を置いて帰ってくるなんて！さっきその子の家の執事さんが届けて下さったのよ！」
「王子谷んちの！？っていうかお母さん、そいつ彼氏候補とかじゃないから！」

「そんなに照れなくても良いじゃない。執事さんのいる家の子に気に入られるなんて、アンタもなかなか隅に置けないわね！」

「ママー、ひつじさんって何？」

「ひつじじゃなくて、し、つ、じ。おウチの事をやってくれる、お手伝いさんの事よ。」

「しつじさんってすごい人なのー？」

「そうよ。執事さんは、お金持ちの人のおウチにいるものなのよ。」
「すごい！」

「お姉ちゃん、将来はお金持ちと結婚かあ…。良いなあー。」

まずい、このままじゃ完全に王子谷と結婚コースまっしぐらだ。
この2人だけならまだしも、お父さん、オジイ、オバア、大オジイまで巻き込んだら確実。
話を逸らそうと、私はダンボールからキャンディを3つずつ取り出して2人の手に持たせた。

「はい、これあげるから、変な勘違いはしないで、ね。」

「わーい、ありがとう！」

「やったー！」

「明日、学校のお友達をおウチに呼んで、これみんなに配りなさい。多分、クラスの子みんな呼んでも余ると思うけど。」

「うん！」

「そうする！」

子供という生き物は、皆総じてキャンディを始めとするお菓子には弱い。

これは優梨亜が幼稚園に行き出した頃、見つけた法則。
まあ、お菓子がなくても明日になれば忘れてるよね。

子供の頭は、日々新しい事を吸収していくものだから。

私はダンボールからプリン味のキャンディを数本持ち出し部屋に向かった。

口ではあんな風に言っていたけど、しばらく買わなくて良いな、ラッキーと内心思っている自分がいるのもまた事実なのだった。

朝ご飯とあいつと(前)

月曜日の朝というものは、不思議な事に他の曜日よりも怠くて眠い気がする。

それは私のような低血圧人間には、ただの拷問でしかない。

しかし今日の朝ご飯は、たー君の家のメロンパン。

メロンパンの時はどんなに起きるのが辛くても、必ずいつもより早く起きられる。

制服に着替えて、ホットココアとメロンパンとサラダとオレンジヨーグルトをテーブルに並べた。

これは私の中で、最高のごちそうなのだ。

遅刻しない程度にゆっくりと平らげて準備をしていると、突如家のチャイムが鳴り響く。

部屋全体がこのくそ忙しい朝の時間帯に誰だという空気になったが、来客を無下にする訳にもいかない。

腹が立つのを抑えながら母が出ると、普段より1オクターブ高い声が聞こえた。

「真梨亜！早くしなさい！彼氏候補君が迎えに来たわよ！」

：そういう事かと思わず漏れた溜め息。

ここ最近、王子谷のせいで溜め息ばかりついている気がする。

聞いた事のない声の原因が分かった所で、未だ勘違いしてやまない母にもう一度念を押そうとした。

「あのねお母さん、こいつは！」

「いいからいいから。じゃ、王子谷君、今日も1日娘をお願いしま

すね。」

「はい。お嬢さんの事は必ずお守りします。」

「ちょ、離せって！お前と登校なんて絶対に嫌だかな！」

瞬間、私の頭に振り下ろされる母の握り拳。

涙目で睨んだが、当然効果はない。

私は奴に手を引かれ、白く輝く高級外車の後部座席に乘せられた。窓から誰だと言わんばかりに覗きにくるうちの家族が見える。

ああ、どうせ高級外車に乗るならもっとお上品なシチュエーションで乗りたかった。

これじゃあロイヤルプリンセスというより、ある晴れた昼下がりに市場へ売られてゆく仔牛だよ。

こうして拒否権も与えられないまま、私は王子谷と一緒に登校する事になってしまった。

車内。

互いに無言の状態に痺れを切らした私は、初めて自分から話し掛けてみる。

「…おい。」

「何？姫野さん。」

「これは一体どういうつもりだ。」

「俺はただ好きな女の子と少しでも一緒にいたいって思っただけだよ。それは誰だって持っている感情だろう？」

「だからっていきなり拉致る奴がどこにいるんだよ！」

「まあまあそう熱くならないで。ね？」

「！」

顔を近付け手を握られた。

たー君以外の男子からこんな事をされたのは初めてだったからか、私は動揺して王子谷を突き飛ばす。

さすがに突き飛ばしたのは悪いと思い謝罪の言葉を述べようとしたら、なぜかあいつは嬉しそうにニヤニヤしていた。

「新鮮だな、こんな反応。他の女の子なら拒むどころかもっと近付いてくるのに。」

「私が他の子と違うなんて今に始まった事じゃねえって分かっているだろ。」

「そうだね。ますます君を振り向かせたくなったよ。ふふっ。」
「…。」

どうやらあいつの心に余計な火を灯してしまったみたい。

それから学校に着くまでの間、私はずっとげんなりとしていたのだった。

学校に着いたので車から降りようとドアノブに手をかけると、運転手さんが光の速さで出て来てドアを開けてくれた。

ドアくらい自分で開けれるっつの思ったが、人の親切はきちんと受け取るべきという姫野家家訓に則り、そのまま開けて貰う。

「どうぞ、お嬢様。」

「あ…すいません。」

「これからはわたくしがやりますから、到着してもそのままお待ち頂きますようお願い申し上げます。」

「え？あ…。」

「大丈夫。植原は運転手の中で一番のベテランだから、安心して任せればいい。」

あのさ、私が戸惑った理由はそれについてじゃなくて、これから先ずっとあんたと一緒に登校するのかって所なんだけど。
うん、今日も元気に話が通じない。

「はい、どうぞ。」

王子谷は下駄箱から私の上履きを出して、足元に置いてくれた。

その周辺にいた女子からの視線が痛過ぎる。

仮にも王子様なら私だけじゃなくてこの視線にも目を向けてやってくれないかな。

そう言ってやると、他の子には興味ないよなんて笑顔でいうもんだから手に負えない。

いつもよりも疲れる朝を過ごしたせいかな、今日の授業はほぼ居眠りばかりしてしまった。

後でなつにノートを貸して貰う事にしよう。

朝ご飯とあいつと(後)

あの日以来、やっぱり王子谷は毎朝私の家に迎えに来るようになった。

来なくていいときっぱり言っても、必ず来る。

その度に家でも学校でも冷やかしゃ嫉妬の視線及び言葉を受けるので、本当に気分が悪い。

一体どうやったらあそこまで凶太くなれるのだろうか。

これも会社社長である両親の血：いや、教育の賜物なのだろうか。

「お姉ちゃん！」

「何？」

「王子のお兄ちゃん、明日も来るのー？」

「来るのー？」

「え…。」

優梨亜と大樹もどうやら王子谷が気に入った様子。

幸い大オジイを始めとする男性陣はまだ受け入れたくないようだが、問題は母とオバア。

あの2人の王子谷を見る目は、好きな若手イケメン俳優を見る時と同じものだ。

ミーハー心で勝手に受け入れられたらたまったもんじゃない。

「さあねえ。それは本人に聞いてみないと…。」

「じゃあ聞いてきて！」

「大丈夫よ2人とも。お姉ちゃんがいる限り、彼はウチに来てくれるから。」

「ほんとー？」

「やったー！」

母の発言で、この家を出ていく計画が一瞬にして頭の中で出来上がった。

まあ、実際問題出て行けないけど。

「優梨亜、そんなに好きなら私の代わりに王子のお兄ちゃんと付き合いな。」

「私、学校に王子のお兄ちゃんより好きな人がいるの。多分両思いなんだ！」

「あ…そ…。」

「優梨亜！お前もか！大オジイは許さんぞ！」

「ちよつと大オジイ！何でそういう事ばかり聞こえるの！？」

「お前もか」って、私は違うよ大オジイ。

でもそう言えばきっと聞こえないふりをするに決まってる。

今日も賑やかだなと思いつつ、ごちゃごちゃ言い合ってる2人を背に私は自分の部屋に移動した。

翌朝。

制服に着替えて下に降りると、いつもより賑やかな事に気付く。

おはようと言ってドアを開けると、我が家に絶対にいる筈のない人物の姿があった。

「すみません。朝ご飯まで頂いてしまって、申し訳ないです。」

「良いのよ良いのよ。ご飯、沢山あるからどんどん食べてね。」

「まあーあんた、本当に男前だねえ。」

「いえ、とんでもないです。」

「お兄ちゃん、これ美味しいから食べてみてよ。」

「ありがとうございます。頂くよ。」

絶対に申し訳ないなんて思っていないだろう。

普通に我が家に溶け込む王子谷を睨むように見ていたら、奴がそれに気付いたようで。

「やあ姫野さん。朝からそんなに見つめられちゃ困るよ。大胆だなあ。」

「あんた、一回病院行ってきたら？」

「真梨亜！早くここ座りなさい！」

そう言っ母が指定してきたのは、もちろん王子谷の隣。

嫌で嫌で仕方なかったが、私は朝ご飯は必ず食べる派なので渋々座る。今日は白いご飯、味噌汁、卵焼き、お漬物という、典型的な日本の朝ご飯だ。

「おばさん、この卵焼きすごく美味しいです。」

「まあ本当に？嬉しいわ！今日はもう用意出来ないけど、またいつでも食べに来てね。」

「ありがとうございます。」

我が家のご飯をすっかり平らげた王子谷は、うちの家族に向かって何度もお礼を言った。

普段の行動がアレじゃなければ、こういう所は素直に好感が持てるんだけど。

どうやら御曹司にはそれが分からないみたいだ。

「姫野さん家って、いつもああやってご飯食べてるの？」

「え？」

いつものように高級外車に乗り込むと、程なくして王子谷が私に質問を投げかけてきた。

「うん。うちは朝も夜も、出来るだけみんな揃ってご飯食べるのが決まりだから。」

「…そう、なんだ。」

「何でそんな事聞くの。」

「いや、なんか羨ましいなって。俺の家は祖父母も両親も忙しくてあんまり家に居ないから、家族でワイワイご飯食べる事なんてほとんどなかった。兄弟がいればまた違ってきたと思うけど、俺は一人っ子だからね。」

「…ふーん。」

「だから、さっきはすごく楽しかったよ。おばさんの卵焼きも、シエフが作るやつより優しい味がした。おふくろの味って感じ！」

「まあ、確かにうちのお母さんの卵焼きは美味しいけど…。」

ほんの少しだけ寂しそうに話す王子谷を見ると、何故か胸がぎゅっと締め付けられる。

御曹司も御曹司なりに苦労があるんだな。

だからって同情して付き合うなんて事はしないけど、うちの家族と触れ合う事で少しでもその寂しさを埋められたら良いなって思っている私もいたのは確か。

奴に追いかけられる事数週間。

私が王子様の心の奥底に隠れていた本音を知ったのは、今日が初め

て
だ
っ
た。
。

スポーツ男子にありがちな法則（前）

今日は土曜日。

アラームを気にせずゆっくり寝ていられる事に喜びを感じつつ、布団を被り直す。

しかしそれを妨げるかのように、枕元の携帯が鳴り響いた。

睡魔という見えない魔物には逆らわない主義の私は、相手を見ずに電源を切る。

そしてそれから1分もしないうちに、母が私の部屋に入ってきた。

「真梨亜！王子谷君から電話よ！」

ああ、あいつだったのか。

っていうか、繋がらないからって家にまで掛けてくるなよ。

「私なら居ないって言ってといて。」

「馬鹿な事言うんじゃないの！早く出なさい！」

またしても私の頭に響き渡る、母の握り拳。

最近よく殴られるけど、脳味噌は無事なのだろうか。

母は受話器元に戻しておいてねと言い残すと、部屋から消えていった。

「…もしもし。」

「随分ご機嫌斜めだね。どうしたんだい？」

「…低血圧な上にお前が電話なんか掛けてきたからだよ！」

「ああ、それは申し訳ない事をしたね。ごめんごめん。」

「さっさと用件を言え。私は眠いんだ。」

「今からうちの学校で、俺が所属するテニス部の練習試合があるんだ。見に来てくれたら嬉しいんだけどな。」

「行きません。」

「そう言われると思って、植原を君の家まで迎えに行かせたよ。」

こいつ、先読みが上手くなったな。
なんて感心している場合じゃない。

「勝手な事すんなよ！植原さんにも迷惑かけて！」

「彼には特別賞与を用意したから大丈夫。じゃ、あと30分もすれば来ると思うから、それまでに準備しておいてね。」

「え、ちよつと！」

言うだけ言って王子谷は電話を切ってしまった。

これはちよつと勝手過ぎるだろう。

だけどせっかく来てくれる植原さんを追い返せる筈もなく、私は腹を括って王子谷の試合を見に行く事にした。

急いでご飯と身支度を済ませると、既に植原さんの車が玄関の前に止まっている。

余談だが「ユリ高」こと我が百合ノ花高校には、休日部活動の応援等をしに行く時でも必ず制服で行かなければならないという決まりがあるのだ。

いつものように高級外車で学校を目指す。

ゆっくり寝る予定が台無しだがぐっすりしていたら、珍しい事に植原さんが話し掛けてきた。

「姫野様、この度は聖哉ぼっちゃまの我が俤にお付き合いさせてしまい申し訳ございませんでした。」

「いえ、いつもの事ですから。謝らないで下さい。」

「先程、ぼっちゃまがいつもお世話になってお礼を買って参りました。貴女の隣に置いてありますので、どうかお受け取り下さいませ。」

「あ、ありがとうございます。わざわざすみません。」

植原さんはとっても気遣い屋さんで良い人だ。

これは最近オープンしたばかりのお店のスコーンじゃないか。
1回食べてみたかったんだ。

学校に到着し植原さんにお礼を言って車を降りる。

テニスコートに到着してからなつ達も誘えば良かったなと思ったが、
今からでは確実に間に合わない。

仕方ないから1人で遠く離れた所で見ていようと思ったら、見覚え
のある女子が目飛び込んできた。

「…なつ？」

「…姫ちゃん！」

「姫！？何で！？」

「みーちゃん！っていうか2人こそ、何でここに？」

互いに驚きを隠せない。

まさかこんな所でいつものメンバーに会うとは。

「3人で王子谷君の試合を見に来たんだよ。姫ちゃんは誘っても絶対
来ないって思ったから、声掛けなかったんだけど…。」

「その様子じゃ、王子谷君に強引に誘われたみたいだね。」

「よく分かってるね…。さすがは親友達。」

「ごめんごめん。って姫ちゃん！？何でおんの！？」

「姫は王子様から応援のご命令。桜、どこ行ってたの？」

「相手側に友達がおったから、ちょっと話して来たんや。」

結局こうなる運命か。

でも1人で見てるより楽しくなって良いかも。

ちよっとだけ安心してテニスコートを見ると、王子谷がこっちに向かって歩いて来るのが見えた。

普段とは違う奴のウェア姿に、3人は騒いでいる。

「良かった。間に合ったみたいだね。」

「スコーン欲しさに来ただけだ。お前の試合なんかどうでも良い。」

「相変わらずつれないなあ。」

「黙れ。」

「王子谷！集合だ！」

「今行きます！あ、俺が出るのはシングルス3だからね。」

「はいはい。」

いかにも興味がなさそうな顔でそう言ってやると、王子谷は部員の輪に戻っていった。

今日はまだ4月とは言え、結構暑い。

これから昼に向けて、もっと暑くなりそうだ。

スポーツ男子にありがちな法則（後）

試合はダブルス1まで終わり、両者共に1勝1敗。

おそらく次のシングルス3が鍵になるだろう。

王子谷の相手は私の好きなタイプに近い、ごつい感じの選手。

いくら奴がスポーツ万能だからって、これは正直きついのではないか。

「姬ちゃん。」

「何？」

「王子谷君が心配なんだね。」

「は！？何で私が…。」

「手、震えてるよ。」

なつに言われて初めて気が付いた。

そんな訳があるもんか。

私があいつの心配なんて、絶対はない。

余計な考えを振り切るように、いつの間にか始まっていた試合を食い入るように見た。

試合が始まってから数十分。

王子谷は序盤から相手を圧倒し、ゲームの主導権を握っている。

相手の攻めも体格の差も、もろともしない。

普段のめちゃくちゃな様子からは想像も出来ないくらい、キラキラと輝いていてかつこよかった。

今なら女子が騒いでいる理由が何となく分かる気がする。

「ゲームセット！ウォンバイ百合ノ花・王子谷！6－1！」

湧き上がる歓声。（主に女子）

私はそれを聞きながら、安心したように大きく息を吐いて顔を両手で覆った。

試合はこの後シングルス1までもつれ込んだが、部長さんが相手を下して3勝2敗でユリ高の勝利。

結局最後までしつかりと見てしまった。

そのくらい、どの試合も見応えがあって面白かったのだ。

「あー、面白かったね。」

「本当！たかが練習試合だしって思ってたら、最後まですごい真剣に見ちゃったもん。」

「…そうだね。」

「…姫、さっきから暗いけどどうしたの？」

「え、べ、別にどうもしないよ？」

「まさか姫ちゃん…王子谷君に惚れちゃったとか？」

「いや、絶対それはないから！あ、それより桜は？」

「友達んところでも行ってるんじゃない？」

なつの言葉はあながち間違いじゃないかも知れない。

惚れたっていうか、見直したよ、王子谷。

あれだけ強いって事は、きっと陰で相当努力しているんだよね。

「姫野さん！」

「何？」

「姫野さんが見に来てくれたお陰で勝てたよ。ありがとう。」

「私、別に何もしてないけど。」

「何もしてくれなくても、近くで見えてくれただろう？それだけ

でいいんだよ。好きな人が側に居るだけで人間は頑張れるんだ。恋の力って、本当に偉大だよ。」

「…。」

眩し過ぎる笑顔で王子谷は言った。

そこにはいつもの破天荒ぼっちゃまの姿はない。

居たのは一生懸命部活と恋愛に勤しむ、ごく普通の男子高校生だった。

来週からちよつとだけ、あいつに優しく接してあげようかな。

月曜日、もうおなじみになった高級外車のお出迎えがやって来た。

靴を履いて外に出ると、爽やかな朝にピッタリの爽やかな笑顔がスタンバイしている。

何でこいつは朝からこんなに笑ってられるんだろう。

「…おはよう。」

「姫野さん…今、おはようって…。」

「何だよ。ただの朝の挨拶だろ。」

「嬉しいよ!」

王子谷はいきなり私を抱き上げた。

通りすがりのご近所さんがみんな見ている。

恥ずかしいからやめてくれと訴えても、やめる気配はない。

珍しくおはようって言ってやっただけなのに、何がそんなに嬉しいかったんだ。

「初めてだよ、おはようって言うてくれたの。」

「それが何だっていうんだよ!」

「ありがとう。」

刹那、私の頬に柔らかい物が。

チュツという音で、それがあいつの唇だと気付いた。

キヤーとか、朝から何なの？なんて声が、やたらと耳に響く。
通園中の幼稚園児に至っては、お母さんに目隠しされている。

「何するんだこの変態王子！離せ！」

「嫌だ。だって離れたら絶対に逃げるだろう？」

「この…っ！」

私は王子谷の頬に右ストレートをお見舞いし、走って逃走した。

練習試合の時に、一瞬でも見直した私が馬鹿だった。

やっぱりあいつは普通の人とは何かが違うおぼっちゃんだ。

おまけに変態だって分かってしまった以上、惚れる所か見直す要素
すらない。

ああ、危うくスポーツ男子の罠に嵌る所だった。

女子の皆様。

スポーツをしている男子は何故かっこよさ3割増という法則があります
ますが、それはまやかしです。

くれぐれも気をつけて。

メロンパン少年物語(前)

もうすぐゴールデンウィークが終わる。

互いのバイトの関係でいつもの4人で遊びに行ったのはたった1日だったが、稼いで遊んどとそこそこ充実した休みだった。

私は高校に入ってから、忙しい時限定でたー君の家でバイトをしている。

レギュラーで入れない理由は、大オジイが厳しいから。

大学生になったらちゃんとレギュラーで入って稼ぐんだ。

おじさんもおばさんも歓迎してくれてるし。

ちなみに王子谷は、この休みは海外で過ごしていたらしい。

お陰で本当に本当に平和だった。

こんな日がいっまでも続けば良いと願ったが、明日から学校が始まる。

憂鬱な気分を引きずったまま、私はベッドへとダイブしてそのまま寝てしまった。

翌朝。

いつになってもお出迎えが来ない。

珍しい事もあるもんだなと思いつつも、久々の電車通学にどこか不安を感じる。

案の定、人の波に揉まれ過ぎてかなり気持ち悪くなってしまった。

こんなの去年までは平気だった筈なのに、慣れって本当に恐ろしい。

教室に着くと、今日は夫婦一緒じゃないのかとか、夫婦喧嘩だとか言われた。

馬鹿を言うな。

私と王子谷は夫婦じゃないし第一カップルでもないっての。

「王子谷は飛行機トラブルで帰って来れなかったそうで、今日は休みだ。」

小村先生の一言に小さくガツポーズをしたのは、当然E組女子の中で私だけだった。

「今日はつまないね。王子谷君がいないもん。」

「だよ。あーあ、連休明けの楽しみが…。」

「せやなあ…。ってか姫ちゃん、なんか元気そうやな。」

「当たり前だよ。鬱陶しいのがないとお昼ご飯が美味しいし。」

「まったく…。あれ？姫、今日はパンなんだね？」

「うん。お母さんが珍しくお弁当作るの忘れたんだ。」

そう、今日のお昼ご飯は、以前朝食に出てきたあのメロンパン。

朝ご飯以外に、お弁当がない時にもたー君の家のパン屋さんにはお世話になる。

「これ、鈴木君ちのメロンパンだよ。」

「そうそう。」

「誰、誰？鈴木君って！」

みーちゃん、君はいつも男の話になると聴覚が冴えるな。

「私の幼なじみだよ。下の名前が尊だから、たー君って呼んでる。」

「ベーカー・blo^{ブロッサム}ssomってパン屋さん知ってる？鈴木君、あの家の子なの。」

「えっ！あそこって結構有名じゃん！前にお母さんが買ってきた事あるけど、本当に美味しかったよ！」

「へえー、そうなんや。そこまで美味しいなら食べてみたいなあ。」

「絶対美味しいから、1回行ってみてよ。ウチの近くだからすぐ分かると思う。」

「うん！」

昼休みを終えて5限目の授業。

退屈なので考え事をしていたら、たー君と出会った時の事を思い出した。

ちょうど今と同じくらいの、緑が綺麗な時期で。

確か公園で1人わんわん泣いていた時、目の前にメロンパンを差し出されたんだよな。

「これやるから泣くな！」って言ってくれた時の彼の優しさ、今でも忘れない。

あの時、このパンはお店で余ったやつだって言い張ってたけど、本当はこれから売られるやつで、おじさんとおばさんに見つかった後泣く程しばかれたって何年か経ってから話してくれた事もあったっけ。

あれから12年。

変わらず友達でいてくれるたー君には、本当に感謝している。

なつともかなり長い付き合いになるが、彼という時間はもっと長い。これからもこんな付き合いがずっと続いてくれると良いな。

放課後。

駅に着いてなつと別れた私は、お使いも頼まれてないのにb l o s

s o mまで来ていた。

たー君の事を考えていたら、なんだか無性に彼と話したくなってしまったのだ。

確か今日は部活がない日だから、お店で手伝いをしている筈。

入ってみると、おばさんはおらずたー君が1人でレジの所に座っていた。

「よっ！」

「ビ：ックリしたー！真梨亜かよ！何だ、お使いか？」

「ううん。何もないけど。たー君と色々話したいなーって思ってる。」

「別に良いけどさ。母さんがもうすぐ買い物から帰って来るから、それまで待っててくれるか？」

「いつまでも待つよ。」

うん、このゆるい空気、やっぱり好きだ。

そう思っていると、おばさんの声が聞こえてきた。

メロンパン少年物語(後)

「ごめんね、忙しいのに来ちゃって。」

「別に良いって。ピークはもう終わったし、平日はあんまり客いねーから。」

「そっか。」

今、私とたー君は公園に来ている。

そう、初めて2人が出会ったあの公園だ。

園内を見渡してみると、小さい頃にあった遊具がほとんどなくなっている事に気付いた。

そういえば前に、危ないから撤去するって回覧板に書いてあったのを見たかも知れない。

公園の遊具は正しく遊べば危なくないのにな。

大体、私が小さかった頃は遊具で遊んで怪我したら自己責任だったじゃない。

今はそうじゃないの？何でも他の人や物のせいなの？

…と声高らかに言っても、人間は時代の流れには逆らえない。

仕方がないとは思うけど、それでも思い出の物がなくなるのはやっぱり悲しいよ。

「この公園もだいぶ変わったよなあ。俺達が遊んでたモン、全部なくなってる。」

「私も同じ事考えてた。なんか寂しいよね。」

「だよな！やっぱり公園には遊具がないと！」

「そうだよ！何でも危ないって撤去しちゃだめだって！」

ベンチに座って遊んでいる子供を眺めながら、遊具の話に花を咲かせる。

するとたー君が、思い出したように私に言った。

「そういえばさ、お前と最初に話したのも今日みたいな日だったよな。」

「あ、覚えてたんだ。」

「当たり前だろ。あの後本気でしばかれたんだし。忘れたくても忘れられねえよ。」

「あっははは！でも私ね、あの時程メロンパンが美味しいって思った瞬間はなかったよ。」

「そ、そう、なのか？」

「うん。きつとたー君の優しさが伝わって来たからだと思う。」

「…。」

急にしんみりした空気になってしまった。

私、何かまずい事言ったかな？

これ、本当に心からの言葉だったんだけど。

「…お前が…。」

「え？」

「…お前が、さ、ダチで良かったよ。ありがとう。」

「ちよっ、どうしたの急に？なんかたー君らしくないよ！」

「何だよ！俺がせっかく礼言ってやったのに！」

「ごめんごめん！ありがとう。」

たー君の声は、心なしか震えていた。

照れ屋で素直じゃない彼が、珍しく一生懸命伝えてくれたんだ。私も日頃の感謝の気持ちをぶつけよう。

「たー君。」

「おう？」

「私も、たー君と友達で良かったよ。これからもうずっと仲良くしようね。」

「ああ！」

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ます。」

昔はよく使った、約束の証。

久しぶりに使ってみると、なんだか懐かしい風が2人の間を吹きぬけた気がした。

私達はその後、学校の話とか友達の事とか、実に色んな話を話しかけた。

王子谷の事も話したけど、かなり引かれたからこれはもう言わないでおこう。

たー君も部活頑張ってるみたいだし、私も部活やってない分勉強頑張らなくちゃね。

「もうこんな時間か。暗いから家まで送るよ。」

「いいって別に。近所だし。」

「お前のひいじいちゃんにぶん殴られるのは勘弁だから送るんだよ、馬鹿。別にお前のためじゃねーから！」

「何だよそれ！」

口ではそう言ってたけど、たー君はしっかりと私の手を握ってくれる。

昔はよくこうやって一緒に帰ったな、と、1人笑っていると、たー君に気持ち悪いって言われた。

「着いたぞ。」

「ありがとう。今日は久しぶりに色々話せて楽しかった。」

「俺も。後で遅くなった俺びにパンでも持ってくわ。」

「良いの？」

「構わねえよ。今度はちゃんと親父に言っけて持ってくから。二度もしばかれてたまるか。」

「ふふっ。じゃ、楽しみにしてるね。」

「ああ。」

たー君と別れて家に入った途端に帰りが遅い！と大オジイに怒鳴られたが、後でblossomのパンが届くと知るや否や大喜びで許してくれた。

助かったと安心し、部屋で着替えて食卓へ向かう。

暖かな気持ちで食べるご飯は、いつもより少し美味しい気がした。

お風呂も明日の準備も済ませ、ベッドに入ってメールのチェックをする。

すると新着のメールが3件。

なつと、たー君と：王子谷だ。

あいつのは嫌だから真っ先に読んでしまいたいと思いメールを開くと、本文にこう書かれていた。

「今日は迎えに行けなくてごめんね。寂しかったでしょう？明日からはちゃんと家まで迎えに行くから、待っていて下さい。」

王子谷のメールは見なかった事にして、なつとたー君にだけ返事を返す。

返信を終えた私は、明日から始まる王子様との追いかけてを憂いている間に夢の中へと旅立っていた。

メロンパン少年物語(後) (後書き)

たー君はきつとずっと前から
姬ちゃんが好きなんです。

もちろん、一人の女の子として。

いつかこれは

たー君目線でも

書いてみたいな。

恋する乙女につき取り扱い注意（1）

恋する女の子は綺麗になる。

私も一応年頃の女の子なので、そんな言葉をよく聞く。

もしそれが本当なら、今の桜はきっとそうなんだろう。

何でもあの時の練習試合でかつての幼なじみの男子と再会し、付き合う事になったそうで。

それからやけに美容に関心を抱くようになっていたのだ。

効果が出ているのかどうかは定かではないが、みーちゃんに言わせれば前よりも肌につやが出てきたらしい。

本当かよと突っ込んだら、あんたは本気で恋をした事がないから分からないの！と返された。

みーちゃんは根っからの恋愛至上主義者で、時々何故か訳の分からない説教を喰らう時がある。

正直な話、これがまた王子谷の求愛並みに鬱陶しい。（あ、それ以外は良い子なんですよ、うん）

この手のタイプは一度暴走したら面倒臭い事がよく分かったので、これ以上何か言うのはもうやめておこう。

そういえば、となつの方に視線をやると、浮かない表情で下を向いている。

「どうしたのなつ？元氣ないじゃん。」

「姫ちゃん…。」

「なっちゃん、嫌な事でもあったん？」

「何でもないよ。ちよっと寝不足なだけだから。」

「ダメだよちゃんと寝ないと！10時から2時の間に、綺麗なお肌は出来上がるの！カサカサお肌じゃ恋のチャンスも逃げちゃうよ！」

「いや、恋愛関係なくね？」

結局なつの浮かない顔の原因が聞けないまま、授業開始のチャイムが鳴ってしまった。

今の私の席は、窓際の後ろから2番目というベストポジション。
日差しもたっぷり入るので授業中に寝るには最高の場所なのだが…。

「姫野さん、教科書忘れたから見せてくれないかな？」

「お前、ちゃんと持って来てるだろ。今机の中に入ってるの見たぞ。」

「いいじゃない。ね？」

「寄るな！向こう行け！」

隣はなんと王子谷。

毎日1教科は必ず教科書を忘れたと言って机をくつつけてくる。
本当に忘れたならまだしも、あいつはわざとやってくるから質が悪い。

右隣も女子なんだから、あの子に見せて貰えよ。

「…あれ？」

王子谷は突如声を上げ、私の頬を触って来た。
無論、手の甲を叩いて追い払ってやったが。

「姫野さん、最近肌綺麗になったんじゃない？」

「何だよいきなり！気持ち悪いいな！」

「ふふっ、恋する乙女は綺麗になるって言うし、ね。まあ元々、君の肌は綺麗だったけど。」

「誰が恋する乙女だ。私は好きな人なんていないから。」

「え、俺が好きなんじゃないの？」

どこまでも話が通じない。

最初に私が言った事は完全に忘れている。

まともに相手をしていては体力を消耗してしまうので、真面目にノートを取る事に集中しようと黒板を見つめた。

みーちゃんと桜が委員会なので、今日はなつと2人で帰る。

いつものようにblog somでお使いを頼まれている事を話すと、なつが私もたまには鈴木君に会いたいと言ったので一緒に向かう事になった。

「鈴木君、元気？」

「うん、相変わらずサッカー頑張ってるよ。」

「そうなんだ。」

「あ、たー君！今日は居るんだ。」

「真梨亜か。今日はミーティングだけだったからよ…って、上村も一緒か？」

「うん。」

「久しぶりだね鈴木君。まだサッカーやってるって聞いたよ。」

「おう。お前も元気そうだな。」

同窓会のような雰囲気、思わず全員笑みがこぼれる。

色々と話したりパンを選んだりしていると、奥の方から男の人の声

が聞こえた。

「尊ー！このパンってどこに並べるんだ？」

「あ、それはこっちだよ、翔^{かける}さん。」

「誰？バイトさん？」

「従兄だよ。今年大学入ってこの辺のアパートに住んでるから、暇な時に来て貰ってる。」

「へえー。」

「鈴木翔です。よろしく。いつも尊がお世話になってるみたいで…。」

「いえ、こちらこそ。」

そういえば、実の兄弟みたいに仲の良い従兄がいるって前にたー君から聞いた事があった。

この人だったんだ。

特別なイケメンではないけど、確かに頼れる兄貴ってオーラがある。それにとっても気さくな良い人だ。

たー君に促され、私となつは翔さんに自己紹介をした。

その時になつが少し熱を持った目で彼を見ていたなんて、私はまだ知らない。

恋する乙女につき取り扱い注意（2）

パンを買って店を出た後、なつは私の家にやって来た。

翔さんを見た時から、どことなくなつの様子がおかしい。
もしかしてみーちゃんの大好きなあれに落ちたのか。

「姫ちゃん。」

「何？」

「私も、本気の恋って出来るかな。」

そんな事を言い出したって事は、きっと私の想像通りなんだろう。
だがまだ憶測に過ぎないので、とりあえず訳を聞き出してみるか。

「どうしたの急に。」

「え、えっと…ね、今日みんなで恋バナしたでしょ？その時、私だけ何もないんだって思ったら、なんか落ち込んで。」

「…。」

「美夕ちゃんは常に恋愛してるし、桜ちゃんと私のお姉ちゃんは最近彼氏が出来て浮かれてる。それに姫ちゃんにだって王子谷君がいるでしょう？」

「いや、最後だけ間違ってるんだけど。まあでも、恋愛は無理にするものじゃないし、何もそれだけで落ち込む必要はないだろ。」

「そうなんだけど…。でもね、今日翔さんを見て、すぐドキドキしたんだ。話した時間は短かったけど、あんな彼氏いたら良いなって思えたの。」

やっぱりそうだったのか。

でも、私もあの人は彼氏には良い物件だと思う。

「そっか。良いんじゃない？あの人なら。なつが本気なら私は応援するよ。」

「本当!？」

「うん。気の利いたアドバイスは出来ないけどさ。頑張れ!」
「ありがとう姫ちゃん!」

とりあえず、想いが叶うまではみーちゃんと桜には秘密。

2人には悪いと思いつつ私達はそう決めて、互いに笑い合った。

それからなつは、ちよくちよくblossomに行くようになったみたいだ。

少しずつではあるが、翔さんとの距離は縮まっているんだろう。

今のなつは毎日本当に楽しそうで、キラキラと輝いている。

そんな親友の姿を見ると、私まで嬉しくなるんだ。

「嬉しそうだね、姫野さん。」

「…あんたには関係ない事だよ。」

「俺の事でも考えてたの？」

「^{ちげ}違えし。勘違いも大概にしろ。」

「照れなくても良いのに。」

「これが照れてるように見えるなら、君は今すぐにも病院に行くべきだね。」

ああ、1度で良いからこいつみたいにポジティブでマイペースに生きてみたい。

若干イライラしながら私の前の席に座るなつを見ると、楽しそうに

笑っていた。

「私も、王子谷君くらい押して押して押しまくるべきかな？」

「やめときな。あんたの良さは控えめな所だから。」

それからチャイムが鳴るギリギリまで、私となつは恋の話をした。前は何となく青春な空気にくすぐったさを感じてたけど、今ではそれも悪くないなって思う。

今日はblossomでバイトの日。

急いで着替えてお店に向かうと、既に翔さんが来ていた。声を掛けようと思ったが、女の人と楽しげに話している。私は会話が途切れたのを見計らって、声をかけた。

「…こんにちは…。」

「あ、真梨亜ちゃん。今日入ってたんだね。」

「はい。」

「尊がないから静かだろ。」

「はは、確かに。」

「真梨亜ちゃん…って、もしかして、姫野真梨亜ちゃん？」

「はい、そうですけど。」

この人は私を知っているみたいだった。でもこんな顔の知り合い、周りに居たっけ？

「覚えてない？私、上村なつみの姉なんだけど。小学生の頃、たまに一緒に遊んでたのよ。」

「…もしかして、いくみさん？」

「そう！思い出した？」

「はい！お久しぶりです！」

「なつみから話は聞いてるけど、会うのはもう何年ぶりだね。」

思わぬ形で親友のお姉さんと再会。

久しぶり過ぎて分からなかったけど、思い出した瞬間に蘇る、一緒に遊んで貰った思い出。

でもどうして翔さんと親しげに話しているんだろう。

「あの、お2人は友達なんですか？」

「いや、いくみとは最近付き合い始めたんだ。」

「大学とサークルが一緒でね、彼から告白されたのよ。」

2人から発せられた言葉に、私はただ口を開けて驚くしかなかった。

「少女の好きになった人は、自分の姉の彼氏だった…。」

恋愛ドラマのあらずじなら、こんな感じになるだろう。

「あの、なつは…？」

「まだ知らないわ。ねえ真梨亜ちゃん、あの子には言わないでね。」

「え、でも…。」

「私の口から直接言いたい。だから、秘密で…。」

「…分かりました。」

その日のバイトは、いつもよりも集中出来ずにいた。

明日からどんな顔でなつの話を聞けば良いんだろう。

恋する乙女につき取り扱い注意(2) (後書き)

この話はちょっと長めです。

まだまだ続きます。

果たしてなっちゃんの恋の行方は…!?

恋する乙女につき取り扱い注意(3)

事実を知ってしまったせいか、今はなつの話を聞くのが辛い。何とか無理に笑顔を作って聞いていたが、それもそろそろ限界のようだ。

この様子だと、いくみさんはまだ話していないんだろう。

「姫ちゃん、聞いている？」

「ごめん。何？」

「もー！そろそろ翔さんに告白しようかなって言ってるのに！」

「あ、こ、告白？うん、良いと思うよ。いつするの？」

「それはまだ決めてないけど…。でも、告白する前にちょっと作戦を練ろうかと思ってるの。姫ちゃん、今日ウチに来れないかな？」

「良いよ。行く行く。」

「ありがとう！」

本当の事を言ってあげるべきなのかどうか、迷った事もあった。だが今ここで言ってしまうては、いくみさんとの約束を破ってしまうし、何よりもなつが傷付く。

心に大きなわだかまりを抱えたまま、私は久しぶりになつの家にお邪魔する事になった。

「あら真梨亜ちゃん、いらっしやい。」

「お邪魔します。」

なつに促され家に入ると、おばさんが迎えてくれた。

控えめでおしとやかに笑う所が、なつとそっくりだ。

廊下を歩いていると、リビングに立ち寄って欲しいとなつに言われ

る。

いくみさんが彼氏、つまり、翔さんを連れて来ているそうで。

「…彼氏？」

「そう。同じ大学の同級生なんだって。お姉ちゃん、今日までどんな人なのか教えてくれなかったから、ずっと楽しみにしてたんだ。」

「でも、私がいたら迷惑じゃない？」

「いいのいいの。せっかくだし姉ちゃんも会ってよ！」

平常心を保てるだろうか。

万が一なつが傷付いた時に、暖かく接してやれるだろうか。

不安なままりビングに入ると、待ってたよといくみさんが笑顔で言った。

それとは正反対に、凍りつくなつの顔。

「お姉ちゃん、彼氏って…。」

「あ、この人。鈴木翔君。ってか、あんた達何回かblossomで会ってるんだってね。さっき聞いてびっくりしちゃった！」

「…そうそう！同級生の鈴木君の従兄さんで…。」

「世間は狭いよね。俺といくみにこんな繋がりがあるなんてさ。」

必死に泣きたいのを堪えながら話すなつを、私はこれ以上見ていられなかった。

早くここから立ち去った方が良いと思っていたら、なつもそれを察したようで邪魔しちゃ悪いから部屋に行こうと私の腕を引っ張ってリビングを出て行く。

後でまた話すからとなつに言っていたいくみさんが、今だけは悪魔に見えて仕方がなかった。

部屋の中でお互い無言で座り込んだまま、時間だけが刻々と過ぎてゆく。

その痛々しい空気を破ったのは、なつの方だった。

「姫ちゃん。」

「何？」

「姫ちゃんは、知ってたの？お姉ちゃんと翔さんが付き合ってるって。」

「…うん。この前バイトの時に聞いた。でも、いくみさんが自分の口から言いたいから秘密にしろって言ってきたし、何よりなつが傷付くのが嫌だったから、何も言えなかったんだ。隠してた事に関しては、本当に申し訳ない事をしたって思ってる。」

「そ…っか…。」

なつに隠していた事を全てを話した瞬間、心につかえていた物が取れた。

それと同時に、なつの目から溢れ出す大粒の涙。

持っていたタオルを差し出すと、力なくごめんと言って涙を拭き始めた。

「私の…為に、何も…言わないで…くれたんだよね？」

「うん。」

「あり…がと…。」

「なつ…！」

「ごめ…誘っておいて…悪い…けど…帰って？1人で…泣かせて…。」

「…。」

「…じゃ…ね…明日ね…。」

「…うん、じゃあね…。」

十年來の付き合いだったなつが、こんな事を言ったのは初めてだった。

必要とされてないって言われたみたいで物凄く悲しかったけど、今は1人になりたいって言っているのだから本人の為にもそうした方が良いでしょう。

おばさんにもう帰ると伝えたら残念がられてしまったので、また来ますと言って上村家を後にした。

暗い気持ちで家に帰ると、優梨亜と大樹がはしゃぐ声がする。2人と一緒に遊んで何もかも忘れようと思っていただいまと声を掛けると、そこには勘違いマイペース王子が2人と遊んでいる姿が。

「…おい！何でお前が私の家に居るんだよ！」

「真梨亜、何だねその言い方は！この男前はね、あんたを心配してウチまで来てくれたんだよ！」

オバアに言われ、王子谷の方を見る。

すると大樹を抱きかかえたまま、奴は言った。

「姫野さん、最近元気がないから心配で。迷惑だったかな？」

「はい、迷惑です。」

「いいえ、全然迷惑じゃないわよね？真梨亜？お部屋でゆっくり話していらっしゃい。」

母のせいで、強制的に私の部屋で王子谷と2人きり。一体こいつと何を話せというんだ。

しばらくの沈黙の後、王子谷がゆっくりと口を開いた。

恋する乙女につき取り扱い注意（4）

「何か悩んでるんだろう？」

私の目を見て真剣な顔で、王子谷は私の心を見透かす。

そんなそぶりは見せていなかったつもりだが、この男だけは違っていた。

伊達に私の事は見ていないという事か。

「お前に話す事なんて何もないけど。」

「顔にそう書いてあるよ。」

「…。」

「君は何か悩みや苦しみがあると1人で抱え込む癖があるよね。その時はいつもより瞬きが多くなるんだ。君自身も上村さん達も気付いてないみたいだけど、俺にはちゃんと分かるよ。」

そこまで観察されていたのか。

いつもなら気味悪がる所だが、私も色々と参っている身だったせいか罵るような事は言えなかった。

「…なつが好きになった人が、自分のお姉さんの彼氏だったんだよ。」

「え？」

「あの子、ずっと本気の恋がしたくて悩んでて、それで最近やっと好きな人が出来たって張り切ってた。でも、告白しようと思ってた矢先に、本当の事を知ってしまったの。私はそれを前から知ってた、ずっと黙ってた。お姉さんに口止めされていたのもあるけど、それが余計にあの子を傷付けた気がして…。」

「…。」

「相当ショックだったみたいで、1人で泣かせてくれって私を追いつ出した。もう10年一緒にいるけど、こんな事言われたの初めてで、どうしたらいいのか分からなくて…。」

…やってしまった。

全部話すつもりも泣くつもりもなかったのに。

あれだけ邪険に扱っておきながら、弱っている時だけ頼るなんて虫が良すぎるにも程がある。

これ以上側に居たらダメだと思い帰ってくれと言ったが、それは王子谷によって阻止された。

「帰れないよ。目の前で好きな女の子が泣いているのに。」

「でも…。」

「ずっと上村さんの事を想って心を痛めてたんだね。やっぱり君は優しい子だ。俺の目に狂いはなかった。」

「…う…っ…。」

「今の彼女に何が必要なのかは、俺よりも君の方が分かる筈だよ。むしろ、これは君じゃないといけない。過ぎた事を嘆くより、気持ちを落ち着かせてゆっくり考えてごらん。大丈夫だよ、必ず答えは出るからね。」

「うん…。」

今日は王子谷の言葉に、不思議と耳を傾ける事が出来た。

自分を見てきてくれた人だからこそその言葉は、いつもよりも重みがある。

ありがとうと素直にお礼を言うと、あいつは何も言わずに微笑んで私の頭を撫でてくれた。

翌朝、教室に着くと既になつが来ていた。

腫れ上がった瞼が、昨日の失恋の苦しみを物語っている。

彼女は私に気付いて、どことなくぎこちなさそうに声を掛けてきた。

「姫ちゃん…。」

「おはよう、なつ。あ、今日ウチで取ってる新聞にあんたの好きな俳優が載ってたから持って来たよ。」

「…ありがとう。あの、」

「ね、今日委員会は？」

「…今日はないよ。」

「じゃ、学校が終わったら駅前のスイーツビュッフェに直行！」

「…うん！」

何もなかったかのように振舞うのが一番の薬。

思えばなつを励ます時はいつもこうだった。

余計な事を言って傷口を広げるくらいなら、黙っていつも通り側に居る方がずっと良い。

今までもそうしてきたのだから、きっと大人になってもそれは変わらないだろう。

姫ちゃんありがとう、大好きとなつがいつもの笑顔で言ってくれたので、私も目一杯の笑顔で返した。

そしてこれからも親友でいようねと、教室の中で改めて誓うのだった。

ビュッフェで散々スイーツを平らげた後、私は王子谷を家まで呼ぶ。

あんな奴だけど昨日は世話になったし、ささやかだけどお礼がしたかったから。

そしたら部活終わりにすっ飛んで来たのか、あいつはユニフォームのまま我が家にやって来た。

「姫野さんから誘ってくれたのは初めてだね。」

「別に昨日のお礼だし、誘ったわけじゃねえから。」

「それでも嬉しいよ。で、お礼って何だい？」

「お母さんの卵焼き。っていうかウチで晩ご飯。まあ、お礼になるかは分からないけど…。」

「ううん。十分過ぎるよ。俺、お婆さんの卵焼き好きだから。ありがとう！」

「どーいたしまして。」

「随分と安上がりなお礼だが、家族揃った賑やかな夕食に憧れる王子谷なら喜んでくれるだろう。」

どうやらその読みは大当たりだったようだ。

そして今まで王子谷を受け入れる事に否定的だった父、オジイ、大オジイが、今日はとても楽しそうに奴と会話をしている。

以前からは考えられなかったこの光景を、私はただ幸せだと思った。

少しずつではあるが、王子谷との勝負の行方が混沌としてきているのかも知れない。

恋する乙女につき取り扱い注意（4）（後書き）

長くなりましたが、
なっちゃんとの友情編は
これで終わりです。

これから

姫ちゃんの気持ちにも

少し変化が出てくる…かも（・▽・）

シワシワの手から貰った物(前)

6月に入り、暑い日が続くようになってきた。

それが原因なのかは分からないけど、最近大オジイの食欲がない。先月の半ばくらいから胃痛は訴えていたが、それでもご飯もおやつも沢山食べていた。

家族全員で病院に行けと説得しても、なまじ超健康体と94歳になっても衰えを知らない食欲が自慢だからなかなか病院に行きたがらなくて困っていたのだ。

しかし今日、老人会の友達と喫茶店でコーヒーを飲んでいる時に倒れてしまったらしい。

学校が終わった後急いで運ばれた病院に行くと、大オジイは病室のベッドに横たわっている。

「大オジイ…。お母さん、大オジイは大丈夫なの？」

「…。」

「ねえ！どうだったの！？」

「真梨亜、ちょっとこっちにいらっしゃい。」

「お母さん！」

病室の外にある談話室に連れ出された。

さっきから心臓がうるさくて仕方がない。

「…胃がん？」

「もう末期で、手術も…出来ないって…。」

「そんな！」

「どんなに長くても、今月いっぱいしかもたないって…。」

「嘘だ！絶対に嘘だ！」

病院という事も忘れて、大声を上げる。

泣き崩れる母を見ると、私は泣いちゃいけないような気がして涙を堪えるしかなかった。

私や大人達はまだしも、まだ幼い優梨亜や大樹はちゃんと受け止められるのだろうか。

大オジイの体はもちろんだけど、それも気がかりなのだ。

いつもは賑やかな我が家が、こんなに暗くなったのを見たのは初めてだった。

夜が明けて朝が来ても、私の心は晴れるなんて事はなかった。

そんな私を氣遣ってか、いつもの3人が街に買い物に行こうと誘ってくれる。

しかし大オジイが入院した事を伝えたと、3人の顔色 が ぐらりと変わった。

「姫ちゃん、私達もお見舞いに行っても良い？」

「え？」

「私、姫んちの大おじいちゃん大好きだよ。騒ぎ過ぎて叱られた事もあったけどさ。でも、それすらも暖かいんだよね、あの人。」

「ウチも、大おじいちゃん大好きや。死んだ自分のおじいちゃんの事思い出すねん。な、姫ちゃん、行ってもええやろ？」

「…もちろんだよ。ありがとうみんな！」

「じゃ、終わったらすぐ病院行こう！」

最近はめっきり王子谷の味方ばかりしていた3人だけど、ここぞという時は私の事を想ってくれる。
今はその優しさに甘えていよう。

家に帰ると、毎朝来てくれるあの高級外車が停まっていた。

何事かと思っていると、赤ちゃん2人分はありそうな大きな花束が車から降りてくる。

そこから顔を覗かせてきたのは、やっぱりあいつで。

「何だよこれは…。」

「大おじいさんのお見舞いだよ。病院まで行きたかったんだけど、君は教えてくれなかったからね。」

「こういう事するだろうって思ったから教えなかったんだけど…。」

「まあまあ。とりあえずはい、これ。」

尻餅をつきそうになるのを堪えながら、私は花束を受け取った。

母に助けてくれと呼ぶと、花束を支えるのを手伝うどころか王子谷と嬉しそうに話している。

ちくしょう、何の為に助けてって言ったと思っているんだ。

花束は大きさはさておき、色々な種類の花があって綺麗だった。

明日から少しずつ分けて大オジイに持って行ってあげよう。

それからというものの、私は暇さえあれば大オジイのお見舞いに出掛けた。

時にはたー君やいつもの3人も一緒に来てくれて、私はその度に本当に良い友達を持ったなと感謝していた。

1人で行った時は、大抵大オジイの昔話を聞く。

記憶のない大オバアの事や戦争の話、初めてチョコレートを食べた時の感動、何もかもが目まぐるしく移り変わった昭和の時代についてなど何度も聞いてきた話ばかりだが、それでも楽しい。

少しでも側にいたい、一緒に過ごせる時間を大切にしたいという願いを込めて大オジイの手を握ると、大オジイは凄く嬉しそうに笑ってくれる。

私が小さかった頃から何ら変わらなかったシワシワの大きな手はいっだって暖かくて、もうすぐ命が尽きるなんて嘘みたいだった。

梅雨入りした6月下旬、私は今日也大オジイの側に居る。

「真梨亜。」

「何？大オジイ。」

「おめえが生まれる前に、大オバアが死んだって話、したよな？」

「うん、何回も聞いた。」

「あん時にな、あいつと約束した事があんだよ。」

「…約束？」

この話は知らなかった。

聞きたい、と言おうとした瞬間、大オジイがゆっくりと口を開く。

今まで語られなかった大オバアとの最後の約束の話を、私はただ黙って聞いていた。

シワシワの手から貰った物(中)

大オジイと大オバアが出会ったのは、お互いが16歳の時。やがて2人は結婚するが、一時は戦争という時代の流れに引き裂かれそうになる。

しかし無事にそれを乗り越え、私のオジイを含む3人の子供にも恵まれて家族みんなで幸せに暮らしたそうだ。

どんな時でも離れずに愛を貰った2人がついに離れ離れになったのは、私が生まれる少し前の事。

体の弱かった大オバアが、大きな病気で亡くなったのだ。そして大オジイと大オバアは、その時にある約束を交わす。

「初ひ孫の成人式を、元気な姿で見届ける。」

大オジイが以前からやたらと私の振袖姿を楽しみにしていた理由がようやく分かった。

愛する人との約束は必ず守りたい、ただそれだけの事。

ちなみに大オジイは、大オバアとの約束を破った事はないらしい。本当に大オバアの事が大好きだったんだ。

「だけども、この約束だけは守れそうにねえわ。最期の約束だったのによお…。」

「そんな事言わないでよ。一緒に振袖選んでくれるんでしょ？」

「ああ、とびきり良いやつ、選んでやらあ。」

私はあくびで涙をごまかしながら、その後も続いた大オジイの話を

静かに聞き続けた。

天の神様ではなく主治医の先生の言う通り、大オジイは6月の終わりに息を引き取った。

お通夜には大オジイの友達はあることながら、家族みんなの友達や知り合い、そしてご近所さんまで、とにかく大勢の人が来てくれて驚いた。

こんな時に、と言われてしまうかも知れないが、私は誰からも愛されたお年寄りを祖父に持っていたんだと思うと、少し誇らしい。

「真梨亜：大丈夫か？」

「うん。何とか、ね。」

「姫ちゃん…。」

「みんな、来てくれてありがとう。大オジイも喜んでる。」

たー君と3人は私以上に泣いていた。

私程ではないが、みんなもそれなりに大オジイとの思い出があるのだ。

「姫野さん。」

「王子谷。」

「香典とお花、ウチの両親の会社から出して貰ったよ。大した物じゃないけど、是非大おじいさんの為に納めて欲しいな。」

「…ありがとう。」

一緒に過ごした時間はかなり短いのに、しかも私は酷い扱いまでし

てるのに王子谷まで大オジイを弔ってくれた。

それでも私の涙腺は何故か壊れない。

死んだ瞬間に色々とお切ってしまったのだろうか。

しかし一旦通夜が始まると、そんな事を考える暇はない程に忙しい。結局一滴の涙も流れる事なく、初七日まで終えてしまったのだった。

大オジイが大オバアの元へ逝ってしまったてから早10日。

未だに私の心は、ぽっかりと大きな穴があいたまま塞がらなかった。なつ達が何か話していてもうわの空だし、王子谷の求愛にも動じない。

当然、授業にも全く身が入っていなかった。

5限目、数学の授業を抜け出し向かった先は屋上。

夏らしい雲一つない青い空を見つめていると、扉が開く音がした。

誰かと思い振り向くと、そこには何故か王子谷が居る。

「お前もサボりかよ。学園のアイドル兼文武両道の優等生が。」

「まあね。だってさ、隣の席に居る筈の好きな子が居なかったら気になるじゃない。」

「サボりたいなら他に行ってくれ。私は一人で居たいんだ。」

「それは出来ないな。今の君の精神状態を考えると、一人で居るより誰かと居た方がずっと良いからね。」

今日に限って随分と余計な世話を焼いてくるのは何故だろう。

今まで普通に接してきた癖に、何だか調子が狂う。

「それは一体どういう意味だ。私はまだ少し立ち直ってないだけで、

それ以外は至って普通だぞ。」

「そうでもないよ。目の下の隈も肌荒れも、ここ最近で見かけるようになったしね。」

「てめえ！何でいちいちそんな所まで見てんだよ！」

「だから、俺は姫野さんの事なら何でも分かるんだってば。」
「…。」

いつも通りのストーカー的発言に、何も言い返せなかった。

そこまで落ち込んでいたのかと改めて気付かされる。

確かに私は大オジイが死んでからあまり眠れていない。

目を閉じていると何故か大オジイとの思い出が蘇ってきてしまうからだ。

「大好きな人が、さ。」

「え？」

「大好きな人が死ぬのは、本当に辛い事だよ。この世界でそれ以上に悲しい事を、俺は知らない。」

見た事もないくらい悲しそうな顔で、王子谷はそう言った。
こいつにも今の私のような辛い別れがあったのだろうか。

シワシワの手から貰った物(後)

「俺は一人っ子だって、前に言った事があったよね？あれは半分嘘だったんだ。」

「半分？」

「うん。実は俺には9つ上の兄貴が居てね。まあ、俺が12歳の頃に事故で死んじゃったからもう居ないんだけど。」

半分とはそういう事だったのか。

こいつにそんな暗い過去があったなんて知らなかった。

「年が離れていた事もあって、すごく可愛がってくれてさ。兄貴だけど、父親みたいな存在だった。兄貴の事は今でも好きだし、尊敬してる。」

「…年の離れた兄弟って可愛いんだよね。お兄さんの気持ち、分かるな。」

「そうだろうね。」

お兄さんの事を話す王子谷は、本当に嬉しそうだった。

ほんの少し話を聞いたただだが、お兄さんを心から信頼し愛していた事が伝わる。

だからこそ失った時の悲しみは本当に大きかっただろう。

「訃報を聞いた時は本当に信じられなかったし、しばらくは何も出来ないくらいに悲しかった。でもね、それは生きている限り避けられない事で、未来を紡いでいく為には必要な事もあるんだって、ある時思ってたんだ。死んだ人は当然戻らないけど、その人の遺志を継ぐ事は出来る。俺の場合はテニスだった。兄貴は中学からずっと

テニスをやっていたから、俺が兄貴の代わりに頑張ろうって思ってた。テニス部に入ったんだ。そう思えたお陰で、こうして立ち直れたんだよ。」

「遺志を…継ぐ。」

「うん。君の場合は何なのかよく分からないけど、大おじいさんが強く望んでいた事を君が成し遂げれば良いんじゃないかな。」

大オジイの望みなんて、これしかないに決まってる。

私が元気に成人式を迎える事。

罰当たりかも知れないけど、綺麗な振袖を着て大オジイの墓前に報告に行きたい。

そう王子谷に話し終えた時、ミントグリーン色のハンカチが私の頬をかすめた。

どうやら知らないうちに、またこいつの前で泣いてしまっていたらしい。

「ごめん。」

「…今までだいぶ無理してたでしょ？ここには俺と姫野さんしか居ないから、ね。」

ずっと泣かなかった理由がようやく分かった気がする。

きっと変なプライドがどこかで邪魔をしていたんだ。

その謎が解けた瞬間、私は王子谷の胸の中で思いつきり泣いた。何故かは分からないけど、こいつの前でなら泣ける気がしたから。なつやたー君の前でも泣かなかったのに、どうしてなんだろう。抱きしめて背中をさすってくれた手が暖かったから？

それとも、他に何か理由があるから？

でも今は、そんな事考えていたくない。

とにかく無性にこいつの胸の中に甘えていたかった。

他の誰かじゃなく、目の前にいるこの男・王子谷聖哉に。

5限目終了のチャイムが鳴り響く。

しかし私と王子谷は聞こえないふりをして、そのまま放課後まで屋上で過ごしたのだった。

シワシワの手から貰った物(後)
(後書き)

氣付いた時には毒されて（前）

あの後散々泣いた私は、王子谷に家まで送って貰った。

あんなに迷惑かけたのに、あいつは嫌な顔一つせず側に居てくれた。これがいわゆる無償の愛なんだろうか。

何もしてやれない、それどころか酷い事も沢山言ってきた女に、どうしてそんな物をくれようとするのだろうか。

眠りに就く前、ふと思い出す屋上での出来事。

やけに体に残るあいつの温もりに心臓が張り裂けそうだ。

決着まであと3日に迫った、7月も後半に入ろうとしている夏の夜の夜。

この蒸し暑さと体の熱のせいで、私はほとんど眠れないまま朝を迎えてしまった。

翌朝、王子谷の顔がまともに見れない事に気付く。

今まではどんなに見ていても平気だったのに、一体どうしたというのか。

だが変化はそれだけではない。

王子谷が私に話し掛けて来なくなったのだ。

鬱陶しいくらいの求愛がなくなって嬉しい筈なのに、何故今寂しいなんて思っただろう。

「あれ？王子谷君が居ないね？」

「さっき誰かに呼び出されてるの見たよ。」

昼休み、いつものメンバーでご飯を食べていると、なつとみーちゃんが王子谷の名前を出す。

その瞬間少しだけ動揺したが、3人に気付かれないように平然と振る舞った。

女の子に呼び出されたって事は、きっと告白なんだろうな。

胸に針が刺さったような痛みを感じていると、桜が続けて言った。

「さっき王子谷君を呼び出した子って、C組の武石たけいしさんやろ？あの子、めっちゃ可愛くて性格も良いつて有名な子やんなあ。姫ちゃん、ぼんやりしとったら王子谷君取られるで。」

「別にあいつは私の彼氏じゃないし、関係ないよ。」

「でもさ、最近の姫って王子谷君を蔑ろにしなくなったよね。何だかんだ言いながら受け入れてるっていうか。」

「うん。それに王子谷君を見る時の姫ちゃんの目、今すごくキラキラしてる。前は…なんかさ、敵意むき出して表情しかなかったけど、徐々に優しくなっていたと思うよ。」

「…やめてよ！私があんな奴にそんな感情持つ訳ないだろ！」

3人に核心を突かれた私は、それを振り切るように否定の言葉を口にした。

何でも分かってしまう関係というものは、時として怖いものである。5、6限目の授業は、王子谷と武石さんの事しか考えられなかった。ちゃんと授業の前に戻って来ればそこまで考える事もなかったと思うが、あいつは授業が始まって来なかったのだ。

その時間中、きっと武石さんと2人きりで過ごしていたんだろうな。

掃除の時間、ゴミ捨て場に向かう途中で王子谷とすれ違った。

その時に一瞬だけ目が合ったが、すぐに逸らされてしまう。

あんなに私を振り回しておいて今更あんな態度を取るなんて随分と勝手な奴だ。

大体、こんな風に離れていくなら好きだなんて言わないで欲しかった。

そしたらごちゃごちゃと悩む必要なんてなかったのに。

もう武石さんの所でもどこでも行けば良いんだ。

私と違って素直で優しそうだから、きっと一緒に居て楽しいと思うよ。

しかしそう思う気持ちとは裏腹に、ゴミ袋を握る右手の力は強くなる。

突然現れたこの感情の正体が分かるまで、私にはもう少し時間がいるみたいだ。

気付いた時には毒されて(前) (後書き)

何となく書いてて思ったんですが、
高校生なのにテストの描写が
一回もないなと…;;

きつとあたしの知らないところで
みんなテスト受けてるんですよ…ね。
うん、そうに違いない！ W W

気付いた時には毒されて（後）

家に帰って携帯を見つめてみたが、王子谷からの着信はおろかメールすらなかった。

前は鬱陶しいくらい、着信履歴とメールボックスがあいつの名前で埋め尽くされていたのに。

最後にメールが来たのは、泣き疲れて家まで送って貰ったあの日。そこから時間が止まったままになっている私の携帯が、今はただ悲しかった。

どうして苦しいんだろう。

どうして寂しいんだろう。

どうして王子谷の事ばかり考えてしまっているんだろう。

このわだかまりをどこにぶつけたら良いのか分からなくなった私は、ベッドに携帯を投げ捨てる。

そんな事をした所で解決する訳ないのは分かっているけど。

しばらく考え込んだ私は携帯を拾い上げ、家族よりも私を理解してくれている親友に話を聞いて貰う為彼女の番号をディスプレイに映した。

この時間ならきつと部屋に居る筈だ。

「もしもし？どうしたの姫ちゃん。」

なつの心配そうな声が聞こえてくる。

私はいつも電話よりメールの方が多いため、何かあったと察してくれたんだろう。

「あの、さ。」

「うん？」

「どうして、王子谷の事を考えると苦しくなるのかな。」

「え？」

なつは私の口からあいつの名前が出た事に驚いている。

それもそうだろう。

ついこの間まで、あんなに毛嫌いしていた男だったんだ。

「なんかよく分からないけど、最近あいつの事ばかり目で追ってるし、考えてるの。現に、今日あいつにちょっと冷たくされただけで今凄く凹んでるし、他の女の子と一緒にだったって聞いた時は本気で嫌な気持ちになった。あんなに嫌いだった筈なのに、私、どうしたんだろう。」

「姫ちゃん…。」

「王子谷が私を見てくれなかった事が悲しいの！私の事だけ好きなんじゃないかったの？って思うの！」

なつの話を遮ってまで、自分の悩みをぶつけてしまった。

私、相当追い詰められていたのかな。

一方的に話してごめんと伝えようとしたら、なつがさっき言いたかったであろう事を話し始めた。

「どうやらこの勝負、王子谷君に軍配が上がったみたいだね。」

「軍配…？」

「今の姫ちゃん、翔さんを好きだった頃の私みたいだもん。」

「そ、れって…。」

「もう分かるでしょ？後は姫ちゃん自身がそれを認めるだけだと思

うよ。」

じゃ、私が言えるのはそれだけだから、と言いつつは電話を切った。

「今日から夏休み前日までの約3ヶ月で、俺は君を振り向かせてみせる。」

王子谷の宣戦布告を改めて思い出す。

もし私がこの気持ちを確認れば、この勝負は王子谷の勝ち。

だが私はあいつに向かって、あんたなんか絶対に好きになるものとクラス全員の前で言ったんだ。

なのにこんな簡単に気持ちが変わってしまうなんて、自分自身の弱さをひけらかしているようなものじゃないのか。

だけどこのまま、何もかもなあなあにする訳にはいかない。

こうしている間にも、タイムリミットは確実に迫っているんだ。

このまま認めるか否か。

私が出した答えは、どちらになるんだろう。

きつと君と同じ

いよいよ迎えた1学期終業式。

退屈な校長先生の話聞いた後は、教室でHRだ。

それが終われば長い夏休み。

だけどその前に、私にはやらなければいけない事がある。

王子谷に、今の正直な気持ちをぶつけないといけない。

あれから今日まで会話はおろか目が合う事もなかったけど、やるしかないんだ。

HRも終わり小村先生が羽目外し過ぎるなよー、と言った瞬間、私は王子谷に呼び止められた。

「覚えてると思うけど、今日は決着の日だよ。」

久しぶりに交わした会話。

それだけで顔に熱が集まってゆく。

ちなみに他のクラスメイトはというと、全員帰らずに私と王子谷を見ていた。

（何気に小村先生まで…。）

気を使っているのか使っていないのかよく分からない光景である。

だけど私は、自分の気持ちを伝える前にどうしても聞きたい事があった。

「ねえ王子谷、1つだけ教えて。」

「何？」

「何で、あんたは私を好きになったの？」

聞きたい事というのは、私を好きになったきっかけ。

お互いに接点なんてなかったのに、あいつはずっと前から私が好きだったって言うてた。

ずっと聞きたくても聞けなかった真実が、今明かされる。

「1年生の5月…。」

「1年生？」

「俺が怪我した時、保健室で手当てをしてくれたよね。」

そういえば、1年生の前期に無理矢理保健委員にさせられた事があった。

いつかに手当てをしたテニス部の男子にやたら気に入られて、何故かそいつの人生相談まで乗って…。

「まさか…！」

「思い出した？」

王子谷は、告白した時完全に俺の事忘れてたもんね、と困ったように笑った。

ああ、あの時の男子はこいつだったのか。

稀に見る美形だったなとしばらく覚えていたけど、夏休みが始まる頃には忘れちゃったんだよな。

でも私は、ただ普通に自分の意見を言っただけ。

それで惚れられるなんて、ちょっと単純過ぎやしないか？

「で、でも、たったそれだけで好きになるなんて…。」

「あの時の姫野さんの言葉、本当に嬉しかったんだよ。俺の心を動かすには十分だった。」

「え、えええ…。」

「好きになるのに、難しい言葉や複雑なきっかけなんていらないうでしよう？」

今度は困った笑顔ではなく、優しい綺麗な笑顔でそう言った。

更に顔に集まっていく熱。

だめだ、もうまともにあいつの顔が見れない。

「最近はやっと試すつもりでわざと冷たくしたけど、どうやらそれは成功したみたいだしね。でもやっぱり、ちゃんと君の口から聞きたいな。」

分かってるくせに言わせようとするなんて、こいつはやっぱりズルい男だ。

でも、こうなってしまった以上は言うしかない。

「…きだ。」

「ん？何？」

「お前が…王子谷が好きだよ！」

半ばヤケクソで、しかも大勢の前で告白。

もちろん人生で初めての経験。

本当に気絶するかと思うくらい恥ずかしかった。

周りからは大歓声が上がってるけど、私にはほとんど聞こえていない。

穴があったら入りたい状況とは、まさにこの事だろう。

そんな事を思っていたら、突然王子谷の香りに包まれる。

ただでさえ恥ずかしいのに、増長させるような真似はやめて欲しい。

「ふふっ、じゃあこの勝負は俺の勝ちだね。」

「…悔しいけどね。」

「俺も姫野さん…いや、真梨亜が大好きだよ。」

「ちょ、名前…。」

「良いじゃない。俺達はどう付き合ってるんだから。あ、ちゃんと俺の事も名前で呼んでよ、ね。」

そうなるにはきつとまだ時間がかかる。

でも目の前の男は、それでも良いよなんて優しく微笑んでくれた。

「全く、あんなに興味ないとか嫌だとか言っというて！でも私も嬉しいよ！おめでと、姫！」

「ホンマ、美男美女のええカップルや。仲良うやらなあかんでえ。」

「ふふっ、私が言った通りでしょ？私ね、姫ちゃんには王子谷君みたいな人が一番合ってると思う。3ヶ月2人を見てきてずっと思ってたんだ。これからもずっと幸せにね、姫ちゃん、王子谷君。」

「ありがとう。君達の応援のお陰でもあるからね。」

私の3人の親友は、自分の事以上に私とこいつを祝福してくれる。鳴り止まないクラスメイトの拍手と歓声は、心の中に響いたまましばらく消えなかった。

ふと繋がれた手。

その時湧き出た感情が嫌悪ではなく幸福に変わったのを感じた。

きっと君と同じ（後書き）

完結っぽいですが

まだちょつと続きます。

もうしばらく

お付き合い下さいませ。

最高の幸せを手

一世一代の大告白から数時間。

あの後王子谷と私はいわゆる「制服デート」とやらに出掛けた。

部活はどうしたんだと言ったら、あいつはズル休みは今日1日だけだよと笑う。

レギュラー選手らしからぬ発言に、呆れつつもほんの少し嬉しかったのは内緒。

学校を出る前、彼氏候補が正式に彼氏になったと母にメールをしたら、今日はごちそうにするから彼を連れて来いと返事が来た。

2人で手を繋いで私の家を目指す。

只今の時刻は夕方6時半。

まだほんの少し明るい夏のこの時間が、私は好きだ。

「ただいま。」

「お邪魔します。」

家に入ると、やけに静かな事に気付く。

いつもなら優梨亜と大樹が騒いでいる時間なのに。

何だよ、ごちそうにするから呼べって言ったのにこれかよと思い台所に通じるドアを開けると、突然耳をつんざくような大きな音が聞こえた。

「お姉ちゃん、王子のお兄ちゃん、おめでとーっ！」
「おめでとーっ！」

優梨亜と大樹の声が聞こえたと同時に、明るくなる部屋。
さっきの爆音の正体はクラッカーだった。

未だに状況が理解出来ない私と王子谷を見て、母が口を開いた。

「あんた達の事話したら、こうしたいって聞かなかったのよ。ごめんね、驚かせちゃって。」

「ううん。嬉しい。ね、王子谷。」

「うん。ありがとう2人共。」

可愛い兄弟からのお祝いに、顔を緩めて2人の頭を撫でる。

嬉しそうな顔を見せてくれたのもつかの間、2人はすぐにお腹空いたとテーブルに走ってしまった。

「さ、ご飯にしましょ。お父さん達も待ってるし、あんた達もお腹空いてるでしょ？」

「うん！」

「王子谷君、卵焼きたくさん作ったから食べてってね。」

「はい、ありがとうございます。」

いただきますの合唱が部屋中に響く。

既に空腹も限界になっていた私と小さな兄弟は、真っ先に骨付きのチキンに食いついた。

父とオジイは、完全に王子谷を気に入ってくれた様子。

王子谷も王子谷で、2人にビールまで注いであげている。

「最初は金持ちのおぼっちゃんなんていけ好かねえなあって思ったけどよ、お前は良い奴だなあ。今まで勘違いしてて悪かったよ。さ、お前もこれ飲め。」

「え、あの、これってお酒ですよ？」

「おいオジイ！未成年に酒飲ませんなよ！」

「母さん、もう酒全部あっち持ってけ。これ以上酔わすな。」

「はいはい。」

「嬉しいねえ。こんな男前が孫の彼氏だなんて…。」

「いえ、そんな。」

久しぶりに賑やかな晩ご飯になった姫野家。

大オジイが死んでからずっと暗かったのが嘘みたいだ。

大好きな時間が彼氏というお釣り付きで戻ってきた事が、本当に嬉しい。

「やっぱり、ご飯はみんなで食べた方が楽しいね。」

「うん。私も同じ事考えてた。」

「さすが、運命だね。」

「何だよいきなり。」

「俺達が結婚したら、こういう家庭を築こう。ご飯の時間が楽しみになるような、暖かくて賑やかな家庭を。」

「何年先だよ。っていうか、それまで付き合ってるかも分かんないじゃん。」

それは随分と先の長い夢物語だな。

自分が二十歳になる姿すら想像出来ないというのに。

「俺は一生、君の側に居るつもりだよ。この気持ちは絶対に変わらない。君が離れていかないように俺の全てで精一杯愛するから、君

にも同じ気持ちでいて欲しい。」

いつの間にか重なった手と、今時少女漫画でも出て来ない海外のチヨコレートのような甘過ぎる台詞。

それはこの顔だからこそ許される大きな特権。

私の家族が居るのもお構いなしにプロポーズをかました男は、余裕の表情で私を見つめていた。

「…な。」

「ん？」

「婚約指輪、ちゃんと買えよな！あと、ウエディングドレスも打ち掛けも着たいし、海外旅行にも行きたい。ここまで言った以上、私の望み、全部叶えてよ！」

「ふふっ、仰せのままに。」

あの余裕っぷりがちょっと癪に障ったから、こっちも私なりのやり方で返事をする。

そんな私達のやり取りを見ていた母が、いちゃつくなら私の部屋でやれと言ってきたので慌てて手を離れた。

待て、このごちそうを食べきるまでは部屋に行きたくない。

卵焼きを箸で持ち上げつつ、結婚までに作り方を覚えなきゃなんて思う私は、もう完全に王子様の虜。

3ヶ月の戦いの末に手に入れた、一生分の幸せ。

ずっと離さないように大切にしていこうと、1人心の中で誓った16歳の夏休みだった。

最高の幸せを手（後書き）

本編はこれで完結です。

もっと長くしても良かったかな…。
ま、でも3ヶ月ですからね。

こんなもんか（いい加減だなおい）。
とりあえずハッピーエンドで
終われたから良かった…；

いくつかこれのスピノフ作品を
考えていますので、

今後はそっちを更新します。

前作以上にたくさんの方に
読んで頂いて、

本当に本当に嬉しかったです。
ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4236r/>

ロミオVSジュリエット～王子と姫の3ヶ月戦争～

2011年8月27日23時11分発行